



恩師から若手への架け橋

横浜市立大学大学院医学研究科
生体制御・麻酔科学 教授

後藤 隆久

「私の臨床教育法」というタイトルでの執筆を依頼され、はたと困ってしまいました。私自身、まだまだ発展途上であり、学生や研修医、若手スタッフとともに勉強しなければならないと思っているからだ。また、医学生や医師はインテリジェンスの高い人の集まりであるから、教師が生徒に「教育」するという、上から目線のやり方は通用しないと感じている。

そんな私が若い人たちと接するとき意識していることがある。それは、「殻を破る」「次の世代への伝承」「行動で示す」ということだ。それには、私自身が卒業してからご指導いただいた多くの先生方の中でも、特に影響力のあったお二人が関係している。帝京大学医学部麻酔科学の前主任教授の森田茂穂先生と、アメリカのマサチューセッツ総合病院(MGH)に私がレジデントとして留学したとき主任教授であったRichard Kitz先生だ。

1. 殻を破る

森田茂穂先生は、残念ながら故人となられたが、私の最大の恩師だ。森田先生はとにかく型にはまらない人で、若者の可能性を信じ、それをあらゆる方面に伸ばしていくことに常に情熱を傾けておられた。森田先生のいわゆる「弟子」には、麻酔の分野で現在大活躍の人材が何人もいるが、それだけでなく、アメリカでMBAをとって経営でも活躍している人、法律を学んだ人、マサチューセッツ工科大学でコンピュータサイエンスを学んだ人など、とにかく多士済々だ。また帝京大学は、医局員のそういうキャリア展開を知ってあこがれを持った若者が、全国から集まってくる医局でもあった。

私が森田先生に初めてお会いしたのは、大学6年生の12月、卒業試験も始まり、卒業後の進路を模索している時であった。現東京慈恵会医科大学附属病院麻酔科ペインクリニック診療部長の北原雅樹先生と二人、当時森田先生がおられた帝京大学医学部附属市原病院

(現ちば総合医療センター)にお邪魔し、カツ定食をご馳走になりながら、森田先生のお話を伺った。「君たちはなんでも好きなことをやってくれ」「麻酔科医になっても麻酔科の枠にはまらなくていい」「日本の将来は君たち若者が担うんだ」など、当時からお好きだった歴史の話をご存分に織り交ぜながら、熱弁を振るわれる森田先生にすっからはまってしまい、そのまま入局を即決した。

入局後、私はMGHに当初3年の予定で留学し、5年に延長してしまいましたが、その間、森田先生は入局する若者を次から次へと海外留学に出してしまうので、ホームグラウンドである市原病院は常に人手不足で大変だったらしい。しかし森田先生はそんなことはおくびにも出さず、ご自分は病院に毎日泊まり込みながらも、私の留学延長願いを二つ返事で快諾してくださった。

現在、私は横浜市立大学麻酔科を主宰しているが、当科医局は、地元神奈川県に関連病院の他にも、遠隔地の色々な専門施設に多数の若手医局員を出しており、麻酔科以外の勉強をしたいと強く希望する若者にも快く対応している。昨今の手術件数増加のせいで、神奈川県麻酔科医師数は決して十分とは言えないが、若手のチャレンジを奨励し、将来に投資するという意味で、今度は私が体を張ってホームグラウンドを守り、若手を外に出す番だと考えている。

1990年代のバブル崩壊とその後長く続くデフレ経済で、日本の若者は夢を持ってなくなったとも言われているが、私はそんなことはないと思う。ただ、刺激がなければ外の世界がわからず、夢の持ちようも殻の破りようもない。どうやって若手に刺激を与え、殻を破らせるか、いつもそれを考えている。

2. 世代を超えた伝承

MGHは私が留学した1988年頃も今も、アメリカで麻酔科レジデントに最も人気のある病院の一つである。そんなMGH麻酔科に私がレジデント留学できたのも、

ひとえに森田先生の後押しと、当時主任教授だったRichard Kitz先生のおかげである。Kitz先生は、英語もろくにしゃべれない私を、森田先生の推薦のみを拠り所に、その他の全てに目をつぶって採用して下さった。これにはMGH内でもいろいろ批判があったことと想像するが、それも全て抑え込んで下さった。

MGHで私のメンターを務めてくれた先生と私は、その後も綿々と交誼を結んでおり、その先生の仲介で、2012年の12月、ボストンでKitz先生とランチをとることができた。そのランチの席に、当科から若手を一人連れて行ったのだが、後からメンターの先生に、「あのランチでKitz先生が最も喜んだのは、自分がレジデントとして採用した後藤が成長して若手を連れ、MGHに来ているということ、すなわち自分が種をまいたMGHと日本の交流が世代を超えて受け継がれていく様子を目の前で見たことだ」と教えられた。

実は森田先生もKitz先生がMGHの主任教授になったばかりの頃に特別に採用したレジデントである。森田先生から綿々と受け継がれるMGHと日本の交流をKitz先生は何よりも喜ばれたのだと思う。

私は2006年に横浜市大に来たが、この医局でまず印象深く感じたのは、先輩が後輩を親身に教えることである。大きな医局なのに、誰もが教育熱心だ。それを見てつくづく思うのは、人は成長の過程で自分より上の者からしてもらったように、今度は下の者に振る舞うということである。すなわち、今の若手にできるだけ充実した体験をしてもらえば、それが下に伝承され、その組織は成長していく。だから私は、今の若手が充実した経験ができるように、持てる時間と能力のすべてをつぎ込みたいと思っている。私が森田先生とKitz先生にそうしてもらったように。

3. 行動で示す

医学生や若手医師は、私たち年齢が上の者が何を言っても、行動が伴っていなければついてこない。だから私も、後輩たちに何を言って教えるかではなく、何を行動で示せるかに尽きると考えている。実際にはさまざまな事情に負けて、とるべき行動をとれないこともしばしばで、内心忸怩たる思いだが、理想は高く掲げて、一生懸命やっているつもりだ。そして、気づいてみると、私の行動は、森田茂穂先生やRichard Kitz先生に強く影響を受けていることが多い。森田先生やKitz先生、そしてその他私を熱心に指導して下さった多くの先生方の貴重な経験やものの考え方が、私より若い世代に伝わり、さらに彼らがその下の世代に伝えてくれるように橋渡しするのが、私の役割だと思っている。そしてそれを行うのに最高の場である横浜市立大学麻酔科医局という場を与えて下さった神に感謝している。



Fig.1. 2013年7月の横浜市立大学麻酔科医局主催 初島サマーセミナーの集合写真 皆、楽しそう！

プロフィール

後藤 隆久 横浜市立大学大学院医学研究科生体制御・麻酔科学 教授

Takahisa Goto

1987年：東京大学医学部卒業

同 年：帝京大学医学部附属市原病院麻酔科

1988年：マサチューセッツ総合病院麻酔科 レジデント

1993年：帝京大学医学部附属市原病院麻酔科

2002年：帝京大学医学部附属病院麻酔科

2006年：横浜市立大学大学院医学研究科生体制御・麻酔科学 教授

趣味：もともとビール好きですが、2013年3月にドイツに行きすっかりドイツビールにはまってしまいました。ドイツではビールは種類も多く、味も多彩なうえ、安い！500ml一箱が100円以下です。最近、ドイツでシェールガス採取のために岩盤に水や薬剤を注入するのを推進する法案が与党から出されたものの、地下水の水質劣化を懸念したビール業界が反対し、世論に負けた与党が法案を撤回したそう。ドイツ国民の良識に乾杯！

